



Title	カント美学の示すもの : カント『判断力批判』をめぐって
Author(s)	甲田, 純生
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41328
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	こ う 甲 だ 田 すみ 純 お 生
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 1 1 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 10 年 7 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 哲学哲学専攻
学 位 論 文 名	カント美学の示すもの —カント『判断力批判』をめぐって—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 里 見 軍 之 (副査) 教 授 神 林 恒 道 助 教 授 入 江 幸 男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は第一に、近代の芸術を宗教的なものからの自律化、純粹化の流れのうちにあるものと捉え、その典型をカントの美学の中に見届ける。現代では芸術はその自律化、絶対化の傾向をさらに徹底的に押し進め、歴史的、社会的基盤からも解き放たれていく。そこで第二に本論文は現代における芸術の生存権を求めて、その歴史的基盤をフロイトの理論の中に探り当てようとするものである。

「第Ⅰ部 享楽の美学」においては、ププナーが自律美学を守る立場から、芸術を真理の場とする解釈学や批判理論に対して、主観的な美的経験から出発するカント美学に、しかも目的論を取り除いたそれに拠り所を見出しているが、筆者はププナーのこの主張の可否をカントの原典に即して詳細に検討する。先ず「第1章 美と感情」では、カントが美的判断を「快・不快の感情」に関わらせ、主体による支配を離れたところに成立する「関心なき満足」と規定している点を確認しつつ、筆者はさらにカントが「快・不快の感情」を生命感情とも言っていることに注意して、それを身体の働きに還元する。「第2章 構想力と悟性」では、快の感情が構想力と悟性との合目的な調和状態であるとされていることを立ち入って検討する。カントは「構想力と悟性の自由な戯れ」の結果が快の感情であるとは言うが、具体的には記述していないので、筆者はその解明のために「天才論」に手がかりを求める。そこではかの「戯れ」は「美的理念を産出する」、あるいは、超感性的なものの感性化である所謂「象徴」を産出するものとされていることから、筆者は構想力と悟性との自由な戯れが人間精神の最も深い地点を暗示していることを指摘する。「第3章 美の普遍性」では、美的判断の普遍性が検討される。美的判断は主観的なものでありながらも、空想や夢と違って、他人にも自己の判断と同じ判断を要求しうるものであるが、形式的にはそれは悟性と構想力が誰にでもアприオリに備わっていることに基づけられる。そして普遍性が要求されるためには、美的判断は普遍的に伝達しうるものでなければならないのだが、カントはその根拠として「共通感覚」を持ち出している。筆者はこれはスコットランド学派の「常識」とアリストテレスの「第六感」の両方の意味を継承するものであり、およそ「理解」というものが成立するための根源的地平であることを指摘している。「第4章 『判断力批判』の体系性」では、カント美学における目的論の問題が取り上げられる。カントは自然全体を合目的体系と見ているが、それでは「自然はすべて美しい」ということにな

ってしまうから、そこに筆者はカントの目的論の破綻を見出している。次にカントの本当の狙いである、目的論による自然と自由の架橋について、筆者はそれは一種の心身問題であると解釈する。即ち「アプリアナ快」は認識諸能力の調和によるが、このことは我々の英知的能力と身体との調和を意味するのである。ところで、英知的能力に対応するのは「超感性的基体」であるが、これは美にも道德にも通底しているところから、カントの「美は道德の象徴である」という言明が出てくる。筆者はこの超感性的基体を「一切の存在者の根拠」として押さえ、ここにプラトニズムとキリスト教的前提を見る。こうして筆者はカントの目的論の根拠の不十分さを指摘しつつ、他方、ブプナーのように目的論を切り離れたカント美学も単に享楽の美学即ち娯楽にしかならないと論定する。

「第Ⅱ部 美と崇高の弁証法」においては、アドルノに依拠しつつ、カント美学の背後にあるものを摘出し、芸術の原初の姿を炙り出そうとしている。「第1章 イデアールなもの」では、まずカントの「崇高」論が取り上げられる。崇高なものは人の生命力を一瞬阻止するような、構想力にとっての不快を媒介にして、一層強く生命力を迸らせる感動を見出すものであり、理性にとっては合目的なものなのである。崇高とは我々の内なる理性理念を外化し、自然に投影したものであり、それを一般化して筆者は「イデアールなもの」と呼び、すでに失われ、もはや到達できないにもかかわらず、我々が求め続けるものという意味を与える。フロイトにならって、例えば恋愛においては、それは「母のイデアール」であり、それを求める欲求はプラトンの「エロース」に当たると言われる。「第2章 エロースなもの」では、プラトンがエロースを理知的なものに祭り上げてしまったのに対し、筆者はフロイト、バタイユを援用しつつ、それを身体的なもの、エディプス・コンプレックス、欲望の抑圧に起源を見る。ところが起源はここにあるにもかかわらず、ホルクハイマー、アドルノの啓蒙の弁証法によれば、啓蒙という自然支配と合理化の過程において、美と崇高とは現実から遊離していくと共に、両者は互いに分離していく（両者は芸術によって辛うじて結合される）。筆者によれば、その典型がカントのうちに見られる。こうしてカント解釈においても歴史哲学的検討の不可避性が指摘される。

論文審査の結果の要旨

本論文は哲学から見た美学の意味あるいは位置付けについて、一方ではブプナーのように、芸術理論への哲学の概念の押しつけに異議を唱え、また「作品」の完結性に疑義を突き付けることによって、美的経験にのみ依拠する自律美学、芸術のための芸術を主張し、そこでまたカント美学への回帰を説く立場があり、また他方にはガダマーのように、カント美学を主観主義として批判し、カントの中ではただ「天才」だけを持ち上げつつ、芸術を真理の経験とする立場がある。筆者は、ブプナーのように目的論あるいは体系性を排除してしまえば、カント美学は単に享楽の美学（娯楽）にしかならないことを論証し、また、ガダマーのように天才概念に依拠し、ロマンティックな概念を多用するのは理論の空洞化につながる危険をもつと批判する。そして筆者はアドルノに準拠して、美、芸術などの起源を辿る歴史哲学的な手法の必要性を主張している。この結論はともかくとして、現代芸術の動向を見据えた筆者の研究の構えは極めてスケールの大きいものであり、瞠目に値する。

さて、論文の中心に据えられているカントの『判断力批判』を哲学的な関心から解釈する場合、その美学に関する記述はカントの本来の狙いである目的論を主張するための準備段階とみなして、あまり細かくは詮索しないことが多い。またカント哲学の鍵概念にもかかわらず、カント自身は具体的に立ち入って例を挙げたり、詳しくは説明していないところが多い。ところが筆者は細心の注意をもってこの文献の要所を解説し、例解を与えることによって、生き生きとした叙述に替えている。例えば、「快・不快の感情」をカントが生命感情とも言い換えているところから、それは結局身体感覚的なものであることを強調し、後でフロイト理論を援用する時の伏線にしている。あるいは、カントは美的判断を「構想力と悟性の自由な戯れ」によると述べているのだが、この表現はキーワードであるにもかかわらず具体的にはほとんど説明していない。一応は、構想力が自由にイメージを膨らませ、悟性がある中に概念によらない規則性を見出すという仕方で両者が戯れる状態を言い表わしているとは言えるが、筆者はさらにカントの天才論の

中にヒントを見付け、その戯れとは「美的理念を産出する」ことにあることを明らかにする。従ってかのキーワードは「超感性的基体」または道徳に関わるものであることを読み取っている。あるいはまた、美的判断の「普遍的伝達可能性」の根拠としてカントが提示する「共通感覚」はある集団の世界理解に関わる「生活世界」に対応すること、しかもそれを共有する諸主体による自然支配を不動のものにするというイデオロギー的側面まで指摘している。

しかし筆者の行論には問題がないわけではない。ブプナーは確かに自律美学を擁護してはいるが、あまり詳細には論証していないのであり、ブプナーを念頭におくだけでは不十分である。自律美学は近代美学の正統であるから、カントのみならずオーデブレヒトやコーヘンなどメジャーな理論を相手に論じるべきである。またカントが美と道徳と人間性を結び付けた点に筆者はカントの思い込みを見出しているが、この理解はカント以後のシラーやドイツ観念論に共通のものであり、カント固有のものではない点にも思いを致し、歴史的視野で検討する必要があるだろう。また、筆者は結論として、美も道徳もエディプス・コンプレックスに起源を持つというフロイトに全面的に依拠し、カントのような高踏的な美学は啓蒙の過程で出てきたに過ぎないと述べているが、この議論は面白い物語にはなっているが、短絡的に過ぎるであろう。フロイト理論をそっくり引き受ける前に、その理論そのものの正当性を吟味することが必要不可欠である。またかりにフロイトの起源論が正しいとしても、そして確かに起源論は重要ではあるが、しかしある事柄のもつ意味は起源だけでは説明できないものだから、さらなる理論の展開が必要であろう。

しかしながらこれらの問題も、筆者の研究が進む過程でいずれ整理され、厳密に解明されていくはずのものである。緻密なカント解釈に加えて、現代思想にも目配りした本論文は、将来のさらなる理論の展開を豊に内包した優れたものである。よって本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。